

巨椋池の水生植物

高木 俊夫

(京大・理・植物)

1. はじめに

巨椋池は木津川と宇治川（行政上は淀川）にはさまれた山城盆地の最低部に位置する一大遊水池であった。

古来より詩歌・文芸に現われ、洛南の景勝地として、文士・画家に愛され、魚貝類や野鳥の豊富なことは沿岸漁民の生活の糧となり、狩猟家のあこがれの的でもあった。

さらにまた水生植物の宝庫であり、本邦産の約8割はこの池で生育していた。特にムジナモは関西唯一の生育地として天然記念物に指定されたのみか、オグラコウホネ・オグラノフサモ・オオトリゲモは学名が巨椋池を記念するよう命名された。⁽¹⁾

水草は学術研究の材料として貢献したばかりでなく、ハス・ヒシ・マコモ・ヨシは周辺農家の副産物として農家経済をうるおしていた。

京都市・宇治市・久御山町の2市1町にまたがり、東西4キロメートル、南北3キロメートル、周囲16キロメートル（4里余り）、面積794ヘクタール（800町歩）、平均水深1メートルの巨椋池は明治40年の淀川改修により、わずか一条の排水路で淀川に接するだけで、全く死滅湖に等しく変化した。⁽²⁾

当然、池の水位は低下し、かつての自然の美観は失なわれるとともに、漁獲高は年々減少し、マラリヤの流行だけは依然として劣えず、その上沿岸の水害は跡をたないことから、池はもはや有害・無用に近い存在になった。

そこでこの池を干拓し、沿岸の水害を根絶するとともに、美田化することによって漁業から農業に転換し、生活の安定をはかろうとする運動がおこされた。

干拓は国営事業により昭和8年工事着手し、同16年竣工をみ、大事業は完成、干拓田への地元民の熱望は遂に酬われたが、巨椋池は消えた。

竣工以来40有余年、特に昭和40年頃からの都市化の波は全国的に例外ではなく、この干拓田も侵食し、それにもなって水質の障害は農業用水に顕在化してきた。その上、京奈バイパスの着工も間近かとなり、これで干拓田は分断・縮少されようとしている。

宝庫といわれた水生植物の消長を早急に調査記録する必要性を感じ、中間報告としてまとめてみた。

今後さらに調査をライフ・ワークとして継続し、巨椋池の水生植物の消長を明確にしたい。

2. 調査の方法

干拓以前の“巨椋池の水生植物”を竹内敬氏はシャジクモ類2種、蘚苔類2種、羊歯類4種、単子葉類100種、双子葉類76種、合計180種で北方系の植物は極めて少なく、殆んどが南方系または暖地系のものであると記されているが、全部の種をあげられていない。⁽³⁾

これに対して、三木茂博士は“巨椋池の水生植物”は47科96属153種3変種と植物目録をあげられ、邦産の全属80%を占めると記されている。⁽⁴⁾

水生植物に対する見解により、種数の異なるのは当然である。筆者は干拓以前と現在を比較するために三木茂博士の記された目録を基準に調査した。

すなわち、1980年より足かけ4年間に35回にわたって巨椋池土地改良区管内を実地にあるき、三木博士の目録に記載の植物に限り採集した。しかし、二の丸池が団地化してからは巨椋池の片鱗をとどめるものは全くなく、給・排水路と休耕田の水生植物が対象となった。

採集品の同定をおねがいがした京都大学理学部村田源講師にはこまかいところのご指導もいただいた。深甚の謝意を申しあげる。

3. 引用文献

- (1) 三木 茂、巨椋池の動植物、巨椋池干拓誌（1981再版）巨椋池土地改良区
- (2) 吉田敬市、生活と巨椋池、巨椋池干拓誌（1981再版）巨椋池土地改良区
- (3) 竹内 敬、巨椋池の水生植物、京都府草木誌（1962）宗教法人大本
- (4) 三木 茂、巨椋池産植物目録、巨椋池の植物生態（1927）京都府史蹟勝地調査報告第八冊
註(1)巨椋池干拓誌にも同目録は掲出されている
- (5) 三木 茂、本邦及び山城に於ける水生植物のフロラの考察 山城水草誌（1937）
京都府史蹟天然記念物調査報告第十八冊

巨椋池の水生植物目録

年月日は採集年月日、()は産量

(1) 隠花植物				ミコシガヤ	81. 8. 7.	(+)
シダ類				タマガヤツリ	80. 9. 23, 81. 10. 11.	(+++)
アカウキクサ			(++)	ヒナガヤツリ	80. 8. 13.	(+)
ミズワラビ	80. 9. 23,	81. 11. 8.	(+)	カワラスガナ	82. 8. 31.	(++)
サンショウモ	80. 8. 18,	82. 9. 4.	(+)	ウシクグ	82. 8. 31.	(++)
(2) 顕花植物				オオハリイ	82. 9. 4.	(+)
1. 単子葉類				クログワイ	80. 8. 13, 82. 8. 31.	(++)
ガマ科				テンツキ	82. 8. 31.	(++)
ヒメガマ	82. 6. 30.		(++)	ヒデリコ	81.9.12. 82.8.8. 82.8.31.	(+++)
ヒルムシロ科				ミズカヤツリ	80. 10. 10.	(++)
エビモ	81. 11. 8,	82. 9. 4.	(++)	ヒメクグ	82. 8. 8.	(+)
ササバモ	82. 9. 4.		(+)	ホタルイ	80.9.23. 82.7.26. 82.8.8.	(+++)
ヤナギモ	82. 5. 20,	82. 9. 4.	(++)	コマツカサススキ	81. 8. 17.	(+)
ヒルムシロ	80. 9. 14.		(+)	ウキヤガラ	81. 8. 17.	(+)
イトモ	80. 10. 10,	82. 10. 15.	(++)	カンガレイ	80.9.23. 82.7.26. 82.8.31.	(+)
オモダカ科			()	フトイ	81. 8. 17, 82. 7. 26.	(+++)
オモダカ	81. 7. 26.		(+)	サンカクイ	81. 7. 12.	(+)
ウリカワ	81. 7. 12.		(++)	シカクイ	82. 9. 13.	(+)
トチカガミ科				ウキクサ科		(+)
クロモ	82. 9. 4.		(+)	ウキクサ	80. 8. 14.	(+++)
トチカガミ	82. 10. 15.		(+)	ツユクサ科		
ミズオオバコ	80. 9. 14.		(+)	イボクサ	80. 9. 23, 81. 9. 12.	(+++)
セキショウモ	82. 9. 4.		(+)	ミズアオイ科		
イネ科				ミズアオイ	80. 9. 14.	(+)
コブナグサ	80. 10. 10,	82. 10. 8.	(+++)	コナギ	80. 8. 13.	(+++)
ジュズダマ	81. 9. 12,	82. 8. 8.	(+++)	イグサ科		
ムツオレグサ	82. 6. 30.		(+)	イ	82. 7. 26.	(+)
チゴザサ	81. 7. 12,	82. 7. 8.	(+++)	2. 双子葉類		
サヤヌカグサ	82. 7. 26.		(+)	ドクダミ科		
アシカキ	80. 10. 10.		(+)	ハンゲショウ	82. 10. 8.	(+)
アゼガヤ	80. 9. 23,	82. 8. 31.	(+++)	ヤナギ科		
ヌカキビ	81. 10. 11.		(++)	マルバヤナギ(アカメヤナギ)	83. 4. 30.	(+)
ノビエ	80. 10. 10.		(++)	タデ科		
ハイヌメリ	80. 9. 14.		(+)	ホソバノウナギツカミ	80. 9. 14, 82. 7. 26.	(+++)
クサヨシ	82. 5. 6,	82. 5. 20.	(++)	ヤナギタデ	80. 9. 23.	(++)
ヨシ	80. 9. 23,	82. 8. 31.	(+++)	サクラタデ	82. 10. 8.	(+)
セイコノヨシ	81. 9. 12,	82. 10. 10.	(+++)	サデクサ	80.9.14. 81.7.12. 82.8.8.	(+++)
マコモ	81. 10. 11,	82. 6. 30.	(+++)	オオイヌタデ	80. 8. 14, 80. 10. 10.	(++)
カヤツリグサ科				ミゾソバ	80. 10. 10, 81. 10. 11.	(+++)
アゼナルコスゲ	82. 5. 6,	82. 5. 20.	(++)			

マツモ科			チョウジタデ	80.10.10,	81. 9.12. (++)
マツモ	80. 9.14.	(+)	ヒシ	81. 9.12,	82.10. 8. (++)
スイレン科			セリ科		
ハス	82. 7. 8.	(+)	ドクゼリ	83. 3.31.	(+)
キンボウゲ科			チドメグサ	80. 8.14.	(++)
タガラシ	81. 4.29.	(+)	セリ	80. 8.14,	82. 7. 8. (++)
キツネノボタン	83. 4.30.	(++)	サクラソウ科		
アブラナ科			ヌマトラノオ	80. 9.14.	(+)
タネツケバナ	81. 4.29.	(+++)	シソ科		
マメ科			シロネ	81. 7.26.	(+)
クサネム	82. 7.26.	(+)	イヌゴマ	81. 7.12,	82. 7. 8. (++)
アワゴケ科			ゴマノハグサ科		
ミズハコベ	83. 3.31.	(+)	キクモ	80. 9.23.	(+)
ミゾハコベ科			オオアブノメ	80. 8.14,	82. 9. 4. (++)
ミゾハコベ	80. 8.18,	82. 8. 8. (+++)	アメリカアゼナ	80. 9.14,	82. 8.31. (+++)
ミソハギ科			キツネノマゴ科		
ミソハギ	82. 7.26.	(+)	オギノツメ	80. 9.14.	(+)
キカシグサ	80.9.14. 80.9.23. 82.9.13. (+++)		キク科		
ミズマツバ	82. 9.13.	(+)	オグルマ	82. 7.26.	(+)
アカバナ科			コオニタビラコ	81. 4.29.	(+)

文献リスト<1982-(3)>

- 青山 勲. 水生植物を利用した水質改善. 用水と廃水
24: 87-94.
- 池田 一・小山田正幸. キシュウズメノヒエ (*Paspalum distichum* L.) における穎花の変異について. 宮大農報 29: 307-310.
- 鈴木紀雄・小寺郁子・藤 智子. 水生動物・水草が植物プランクトンの増殖に及ぼす影響. 滋賀大教育学部紀要(自然科学) 32: 93-103.
- 橘ヒサ子. 松山湿原の植生—北海道高地湿原の研究(V). 北海道教育大大雪山自然教育研究施設研究報告 No.17: 17-36.
- ・佐藤 謙. 天人峡瓢箪沼の湿原植生(予報). 同上 No.17: 37-45.
- 千蔵昭二・大隈光善・矢野雅彦・中村盛三. 筑後川下流域のクリーク雑草「チクゴズメノヒエ」の生態と防除 第1報 発生の状況とクリーク環境. 雑草研究 27: 283-287.
- 保田茂次郎. ホテイアオイによる排水処理. 水処理技術

23: 565-569.

- Deguchi, H. & H. Inoue. Lake moss-balls found in Tierra del Fuegos and Brunswick Peninsula, Southern South America. Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, Ser. B. 8: 145-150.

<補遺(7頁)>追加

- 喜納政修・翁長 亨・宮里光博・与那城昂. 1979. ホテイアオイによる硝酸性窒素の吸収. 琉球大学工学部紀要 18: 121-139.
- 枚村喜則・西上一義. 1977. 油井ノ池の浮島植生. 山陰文化研究紀要 自然科学篇 17: 1-11.
- 日野幹雄・歌原英明. 1977. 水草のある流れの水理学的研究. 土木学会論文報告集 266: 87-94.
- 安原健允・新崎盛敏. 1976. 日本に産するマリモの研究 VII—山中湖産フジマリモについて— 日大文理(三島)研究年報 25: 9-14.
- (次号につづく)